

「キリストが私の内に生きておられる」

2020年07月31日

私は神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストと共に十字架につけられました。生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです。私が今、肉において生きているのは、私を愛し、私のためにご自身を献げた神の子の真実によるものです。(ガラテヤ書2章19節～20節)

パウロは「人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただイエス・キリストの真実によるのだということを知って、私たちもキリスト・イエスを信じました」と力説した。イエス・キリストの十字架と復活によって、神は人の罪を赦し、あるがままを「よし」と是認し、神と共に生きる救いを与えてくださった。この救いは、人の行いに関わりなく、無償、無条件で、全ての人に既に一方的に与えられたものである。この信仰義認がパウロの告げる福音の核心である。

アンティオキア教会で、パウロは福音の真理に従っていないペトロの行いを非難した。異邦人と共に食事をしていたユダヤ人キリスト者がユダヤ主義者によって律法違反の「罪人」と見なされるならば、キリストは罪に仕える者となるのか。決してそうではない。律法を打ち壊していながら、再び、律法を建てるとしたならば、違反者になるではないか。「私は神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストと共に十字架につけられました。生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです。」パウロはファリサイ派の優秀な学徒として、律法に対して、誰よりも熱心であった。その熱心さが、十字架で敗北して殺されたイエスをキリストと信じる信仰はあり得ないと、迫害していたのである。そのパウロは復活した主イエスと出会い、180度の回心を迫られた。人は律法を守って、神からの義に与ることはできない。行いを根拠にする者は、できたと言って誇り、できなかったと言って卑下する。そして、他者と比べ合い、差別と序列化をもたらす。人間の力を頼るところでは、浮き沈みばかりで、一時も魂の休まることはない。キリストの十字架は、私たちが律法が生み出す罪の世界から解放し、キリストの復活は、永遠に生きる神の命に与らせ、神に生きることである。パウロは、キリストの十字架と共に罪に死んだと断言する。死んだパウロが生かされるのは、復活されたキリストがパウロの内に生きておられるからである。

だから、「私が今、肉において生きているのは、私を愛し、私のためにご自身を献げられた神の子の真実によるものです」と言う。パウロは復活の主イエスに出会った時、主イエスを信じるキリスト者たちを迫害する私を赦すために、十字架にご自分を献げるほど愛してくださるキリストの愛に圧倒されたのである。彼は、律法を守る自分の立派さを誇ることの無意味と空しさを知らされた。神の子イエスの真実、キリストの十字架と復活によって、赦され、生かされている自分を見出した。それが「生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです」という告白である。

「私は神の恵みを無駄にはしません。」恵みとは無償の恩寵である。無償の恩寵に対し、私はこんなことをしました、お認めくださいと言え、それは恩寵ではなくなる。だから、神からの義が律法遵守を通して得られるならば、キリストの十字架の死は無駄であったということになる。パウロにとって、キリストの十字架が全てであり、それ以外のところからの救いはあり得ないのである。